
雨達の祝福

由樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨達の祝福

【Nコード】

N1837A

【作者名】

由樹

【あらすじ】

ずぶ濡れになった鈴木真理亜に雨達は祝福してくれるのか…？全
ては雨の気まぐれによって、始まるんです。

（前書き）

現代っ子の心の声や、暴走ぶりなどを表してみました。
少しギャグの要素も入っているかもしれないラブコメです。

「あーっ！」

雨が降ってる。梅雨だから当たり前のことだけど…。
最悪。

今日傘忘れたんだよ。朝はカラッと晴れてたから、常備してたオレンジの猿が付いてる折りたたみ傘を置いて来ちゃったんだ。

「真理亜、傘無いの？今日は午後から降るって巷で有名だったのに」
「巷って何よ…」

私——鈴木真理亜の友達、小澤^{かよ}香葉はピンク地に品の良い花柄の傘を差して颯爽と帰って行った。

「くっそう…。薄情者」

私と香葉は方面が逆だから、傘に入れてもらうことは出来ないけど、素っ気無さが寂しい。

香葉はクールで大人びてる。だからちょっとくらい冷たく感じる場所があっても、それが彼女の性格だから本当はなんとも思っていない。

雨は激しさを増していく。職員室の傘は全部貸し出されたというし、打っ手が無い。

腹を決めるか。

電車の中、びしょぬれで所在なくしてる私が容易に想像出来る…。走る、走る雨の中。まるで滝のように痛い。滝の中に入ったことなんかないけど。あくまでも想像だけど。私って、想像力豊かだから仕方ないよ！

…っってもう、意味わかんない…。

ハアハア

息を切らして三分後、やっと駅に着いた。お財布の中身十二円で何よ。ビニール傘さえ買えないじゃない。

それにしても惨め。制服びちょびちょで、髪の毛乱れまくってて。

まだまだ乙女の高校二年生なのに！恋に恋するお年頃なんだから。
ふんだ。

ぐじぐじ考えてないで、さっさと家に帰ろう。家の近所の駅に着いたら、なりふり構わず走ろう。…今もだったけど気にしないで。雨の電車は嫌い。濡れた傘が体に付いて不快。でも今は私がその傘状態だわ。ごめんなさい、皆近付きたくないよね。でもぎゅうぎゅうで満員だから密着せずを得ないのよ。傘の気持ちかわかった。肩身狭い思いさせてごめんね。

よし、着いた。家までは徒歩十分…。さりげなく距離がある。親は食事に行つてて誰も迎えには来られないし、十二円じゃタクシーには乗れないわ。

家に帰れば濡れた体ともおさらば出来る。てことは、もう、どんなに濡れても良いよね…。さっき覚悟したことだもの。

きゅつと握り拳二つ。いつかプリクラを撮るときにやった、いわゆるガッツポーズ。ネタがないとき皆やってたけどなんだったんだろう。ガッツつて…。プリクラ撮るだけなのにね。

精神がどこかに行つてしまっていたわ。私は…雨に飛込まなきゃいけないんだから…！

「とうつ」

「あの…」

……。

……？

「あ？」

ふと気付くと、私の左隣に男子学生さんが立ってる。あつ、やだよだ、かっこいい。同い年くらいかな…爽やか！身長は百七五センチと見た。

とは言え、私は変な気合い入れた後だったこともあつて状況把握が遅れ、「あ？」なんて可愛さのカケラもない声を出しちゃった以上、恋愛に発展させるのは難しそう。しくじっちゃった。

「あの、傘どうぞ」

このシチュエーション知ってる。漫画やドラマでよく見るじゃない。あつ、でも、うちのクラスの麻実あさみって可愛い子もされてたか。
「えっ…良いんですか？」

私、すごくビックリしてる。もう既に濡れきっている私に傘の必要はあるの？とも思うけど、そうじゃなくて単純に嬉しい。

「俺すぐそこなんで。ビニール傘だから捨てちゃって良いです」

声も高からず低からず、しっかりした素敵な声。歌上手そう。

「有り難う…。本当に助かったあ」

思わず笑顔になる。すると彼はうつすら頬を赤らめて、

「じゃあ」

と走って帰って行った。意外とウブなんだ…。ウブっていつの言葉なのか知らないけど、凄く優しい人だな。今日の雨にちよっぴり感謝。

「おはようございます」

学校に着いて、皆に挨拶。香葉は笑って、昨日は大丈夫だった？なんて聞いてくる。…自慢してやる。

「駅で、マジかっこいい、爽やかな男子学生に傘渡されちゃったあ。まるでドラマの世界だから」

一瞬顔をしかめて考える香葉。そんな顔しなくたって良いじゃないの。

「あんだね…妄想癖ヤバイよ？冗談のつもりだろうけど笑えない」
うんざりしてます、と溜め息を付いて態度で示す。

「しっつれないな！妄想癖じゃなくて、想像力があるの。…ってか、これは事実だし」

「本気？じゃあ…相当可哀想なオーラ出してたんでしょ」

「うっ…」

それはもう、底はかたく可哀想でしたけども。

「そりゃあ、見てていたたまれなくなっただ可能性もちよっぴつとはあるよ。でもさあ、そんなに否定することなくない？」

外見は奇抜じゃないもの。身長は平均の百五十九センチだし、髪の毛は栗色程度のカラーリング。肌は美白でメイクも清楚なんだから。平均ちよい上だと自分では思っています…。えへへ。

「まあいいや、飽きてきた。彼に恋した？」

「——ちよつとお、なんで傘借りた…てか、もらった？だけで好きになんないやいけないのさ。あたしは堅いよ！」

嘘、軽いです。かつこいーって騒ぐただのおバカですつ。

「はい、妄想癖。ホント真理歪ってウケるよね。考え方が面白い」「いや別に、ウケなくて良いから」

話が噛み合ってるかよくわからないけど、なんだかんだ言って香葉と喋ってる楽しい。予期せぬ返答だったりするし。価値観違うから一緒に住みたくはないけどね。ルームシェアなんて無理だと思う。

「今日は雨じゃないのか…」

折角折り畳み傘持って来たのに。重さは軽いけど、それでも傘張るのよ…。傘だけに、つか！ぷぷ。

「ばいばーい」

香葉や、麻実や、その他諸々の友達と別れる。今日も楽しい学校でした

担任の熊井ちゃんの“しゃっくり止まらない病”で思う存分笑ったあ。現国なのに授業出来なかったもん。訴えてやる！なんてね。この台詞好き。

今日の電車はクーラーによって快適。昨日が嘘みたい。

「……あら…？」

うわっ、また失敗。おばちゃんみたいな驚きの声あげちゃったよ…。

折角、折角、昨日の爽やか君を見つけたのに…！

しかも同じ車両。隣の会社帰りのサラリーマン、推定四十三歳を飛び越した隣にいる。

(気付くかなあ…？念送るからねっ)

心の中で、左見る、左見る、と念じながらチラ見をしまくる。拳動不振かな。

……。

……。

……パチッ。

おっしや、目合った！

にこっ

余裕のスマイルを浮かべてみる。彼はすぐに私のことを思い出したみたいで、また顔を赤らめる。

「昨日はありがとうー」

四十三歳(推定)を押し退け、隣に行く。

「この電車、いつも使ってるの？」

昨日初めて存在を知って、今日電車に乗る貴方を初めて見た。

「ああ…うん。この時間が多いかな」

「そうなんだー。じゃあ明日、傘返すよ」

容易に逢えそうなのがわかったんだから、借りたものは返さなきゃですよ。

「あつ、うんっ。じゃあ待ち合わせしましょう」

少し嬉しそうに声を弾ませる。素直だなあ…。年下かも。

「あの、何年生？」

まずは気になったことを訊く。

「あ、高一です。貴方は？」

「私は高二。そっかあゝやつぱり、年下……」

「うっそ、二年なんすか?!すげえ!」

…はい?なんで凄いのか読めません。私の話を遮るほど嬉しいみたいだから、水は差さないで置く。

「うん。えっと待ち合わせだっけ?私は丸像駅で乗ってるけど、君は？」

「俺は手前の澤口です。じゃあ、丸像で降りるんで、駅にいてくだ

「さいよ」

「うん、わかった。…じゃあ降りますか」

丁度駅に着いた。

「それじゃ、また明日！」

眩いばかりの笑顔を残して帰って行った。

爽やかでかつこいいいプラス、素直で可愛い…だな。年下も良いもんだねえ。

「ごめん、待たせちゃった？」

丸像駅のホームに着くと、もう彼が立っていた。

「いや、今さつき着きました」

はにかみながら近寄ってくる。うん、素敵。

「はい、傘。有り難うね。君はいつも親切な人なの？」

傘を差し出す行為、よくやってるのかな。それならあまり期待しない方が良さいし…。

「俺は親切ですけど、流石に傘は貸しませんよ。めっちゃ緊張したんスから」

「ふうん……。じゃあなんで、貸してくれたの？」

核心を突いてやる！一応先輩なんだし、ちよつとくらい聞いたって大丈夫でしょ。

「あゝ…ちよつと、似てたんスよ」

「えっ？だ…」

「おあつと、誰とか訊かないでくださいよ！普通に言えないス」
チツ

心の中で軽く舌打ち。この子、遮るの上手いわ。

……“この子”…？

「ああそつか、なんか違和感あると思ったら。まだ名前聞いてなかったよね。あたしは鈴木真理亜」

そっちは？と目で促す。

「俺は神田 剛。真理亜さん…で良い？」

「いいよ。じゃあ真理亜は、剛君？神田君？」

「剛で良いです。俺、君付け苦手なんすよね」
「苦手とかあるんだ…。」

「わかった、剛ね。確かにしつくりくるかも」

「真理亜さん、電車来ました」

「えっ?! ああ、ほんとだ」

ずっと剛のこと見てたから、周りが見えなくなってた。

その日は電車の中で携帯の電話番号とメールアドレスを交換し、
終わった。

——ヤバイ。結構、好きになってる…。——

「雨だあ……」

朝っぱらから、ザアザアと木々を揺らしながら落ちる雨。

もう、私は誰に似ていたというの？

なにともなしに雨に問いかける。

あなた達が…もしくは、あなた達の仲間が私と剛を繋ぎ合わせた
んだから、責任取りなさいよね！

大体さあ、めっちゃかつこいい人に傘渡されて、好きにならない
わけがないじゃない。

(…?)

携帯のライトがピカピカ点滅してる。

「メールだ。…もしかして！」

パコツと携帯を開けると、剛から！

『おはよう、雨っすね！今日は傘忘れちゃだめですよ！また駅で渡
してあげても良いですけど。(笑)』

きゅぅぅん。もうだめだ、私、完璧に恋しちゃってる。胸がド
キドキするよっ。

『剛に会えるんだったら傘忘れようかな』

即座にメールを打ち、慌てて着替える。

雨とお喋りしてたから時間がなくなってきた…。

夕方、雲のせいで薄暗くなった道を歩く。

雨は午後二時頃に止んで、今は雨上がりの懐かしい匂いが辺りに立ち込めている。

今日は部活で遅かったから剛には会えない。

片想いつて切ないよ。彼、学校でも絶対人気者だよ。

さっさと告っちゃおうかな…。躊躇ってたら女神様の前髪を掴み損ねちゃうかも。

よし！どうせ学校違うんだからフラれたって気まずくないし。善は急げだし！

『剛、今どこにいる？真理亜は学校出たとこなんだけど、もし家にいたら、私達が出会った一矢駅^{かすや}に出てきてもらえないかな（＜―＞）』

直接告るよ、どうせなら。

「真理亜さん、どうしたんすか？」

笑いながら手を軽く振る剛。私服はＴシャツにジーパンなのに、決まってる。

「あのね、言いたいことがあって。いきなり呼び出しちゃってごめんね？」

「全然いいですよ。どーせ家ではーつとしてただけだし」

そっかあ、ぼーつとしてたんだあ…。かつこいいなあ…。

かつこよくないか。あは。

「じゃあもう、単刀直入に言っちゃおう！」

すうーはあー。息を整えて…。

「あたしつ、剛に傘借りたとき、一目ボレしちゃったみたいなの！えーと、付き合っただけで欲しいなって、思うんだけど…どうでしょう…」

尻つぼみになっちゃった。

「あ……」

剛は左手をもみあげのところに持つていき、軽く搔く。

「実は俺、傘貸す前から真理亜さんのこと知ってたんだ。その…似てたから」

私、知られてたの？…誰に似てるの。

「で、似てる人つてのは、うちの姉さんでさ。俺の両親が別れたときに、俺は母さんと、姉さんは父さんと言って言う風に別れちゃって、何年も会ってないんだ。姉さんも高二で、真理亜さんと同じ年だから余計びつくりした」

お姉さんに似てるから…？あ、だから高二だつて言ったときに“すげえ”なんて喜んだんだ。

待つてよ、じゃあ、私を好きだつて要素ないじゃん。

お姉さんみたいな人がずぶ濡れだったから傘を差し出したんだ――
――。

「わかった、ごめん。有り難う」

耐えられない。やっぱり早まったんだ…。

行動を起こせば上手くいくような気がしてた。

バカな自分が本当にいやだ。

剛の制止の声を聞かずに駆け出す。

雨も、自分も、大っ嫌い！！

『真理亜さん、話聞いて。』

夕食後にメールが届いた。剛…。

返事、しなきゃ。

「何？」

返事を打つてすぐに、電話がかかってきた。

やだっ、出たくない…。恥ずかしいじゃん。

てか、電話してきて何をしたいの？

もう一回、しっかり私を振りたいてこと…？

そんな風にぐちゃぐちゃ考えてたら電話が切れた。

「あっ！」

…やっぱり出れば良かった。電話で喋るなんてもう二度と出来ないかもしれないのに。

チカチカ…チカチカ…

またランプが点滅する。剛からの電話、今度こそ出なきゃ。

「もしもし」

「真理亜さん？なんですぐ出てくれないんだよ。ちゃんと話したいって言うてんじゃん」

ちよつと怒ってる…？

「ごつ、ごめん。でも、怖かったから…」

「怖いって何が？真理亜さんズルいよ。言い逃げするなんてさ」

「うん……ごめんね」

ふてくされたような声を出す剛。

こんなこと思ってる場合じゃないけど…かわいい……。

「で、俺が言いたいのは、うちの姉さんに真理亜さんが似てるっていうのは気になりだしたキツカケでしかないんだってこと。俺の言い方も悪かったけど話は最後まで聞いて」

「あつ、はい」

キツカケでしかない…？

「うん。で、俺別にシスコンってわけじゃないから。姉さんに似てるっただけで傘渡したりしない。電車の中でずっと見てて……その、ずっと好きだからだよ！」

好き…？

「えっ、ん？剛は私のことが好きなの…？」

「……そうだよ。そんな確認しないで、恥ずかしいから」

「やだっ、ほんとにいい？」

じわ…

涙が溢れる。恋が叶っちゃった。

しかも、ずっと好きって…嬉しすぎる。幸せ過ぎる！

「大好きだよお、剛い…」

うわーって、大きな声で泣いちゃった。

剛はずっと笑ってた。

真理亜さんって案外子供っぽいね、可愛い。なんて言ってくれた。

雨達の祝福の中、私達は出会ったんだね。

（後書き）

如何でしたでしょうか。話のテンポを大事にしたつもりです。もしよろしければ感想、アドバイス等々よろしく願います。有り難うございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1837a/>

雨達の祝福

2010年10月8日15時33分発行